

幼児の教育

'96
11月号

家庭—保育所—幼稚園

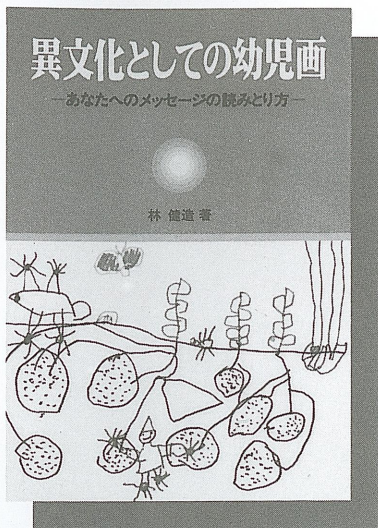
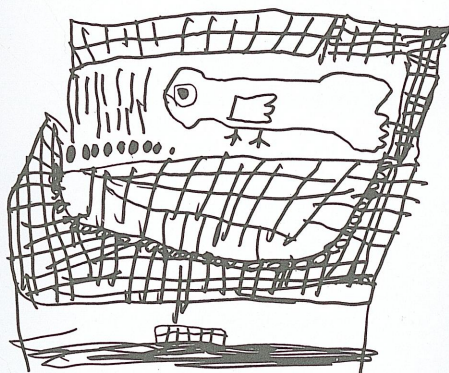


異文化としての幼児画

—あなたへのメッセージの読みとり方—

幼児の絵は特別の意味をもっています。それはあなたへのメッセージでもあります。幼児の表現を読み取ることが大切です。それを理解することによって適切な援助の仕方がわかってきます。

新刊



- 幼児の生きた造形表現がわかります。
- 発達による絵の読み取り方がわかります。
- 実際の造形表現の援助の仕方がわかります。
- 現職の園長としての保育譚^{ばなし}を楽しみながら保育の心が身についていきます。



林 健造・著

A 5判・160頁・定価1,500円(本体1,456円)

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第95巻 第11号



幼児の教育 目次

——第九十五卷 第十一号——

© 1996
日本幼稚園協会

ある日……………(4)

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(8)

「学校」の役割が変わった……………深谷 昌志…(6)

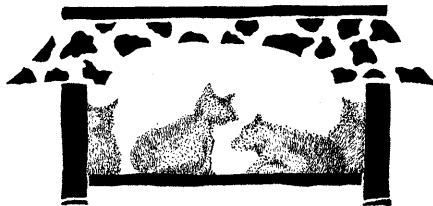
保育学文献賞を受賞して(2)

「子育てひろば」としての保育園をめざして……………新澤 誠治…(10)

子ども時代と私(4) 満州開拓団の引揚者の子……………黒岩 卓夫…(18)

ある日の育児日記から(7)……………佐藤 和代…(25)

手を使うこと——未来を開く……………津守 真…(26)



「こどもテレホン相談」から(6)

ガラス細工のような若い心に接して……………小島 直美…(33)

震災後の子どもたち(II)

わすれないあなたのことを わすれないあのひのことを…森谷 恭子…(40)

『十里霧中』—息子たちのイギリス公立校体験記(6)—…豊田 一秀…(46)

朝のこと……………高橋 陽子…(51)

外国の文献から『心情と知性の教育—日本の就学前と小学校教育に関する考察』

第四章 小さな集団—子どもたちの活動の拠点……………徳田 治子…(57)

表紙絵・いわむらかずお「なにかありそうだ」

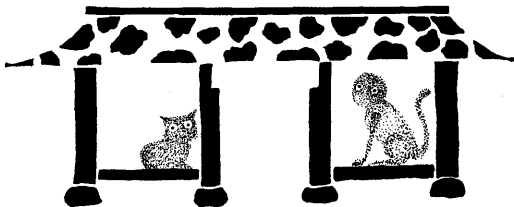
扉題字・津守 真

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・彌永たたえ「動物ビスケット」

編集委員・田代 和美／伊集院理子・高橋 陽子

編集部・仲 明子



ある日





二十一世紀にむけて幼児教育を考える(8)

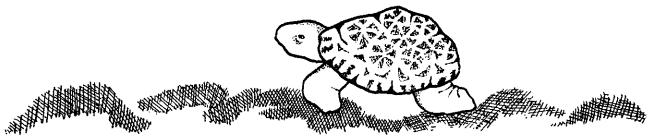
「学校」の役割が変わった

深谷 昌志

情報化の歩み

この夏に『子どもの生活史——明治から平成まで——』（黎明書房）を刊行した。書名の通りに、生活レベルから子どもたちの歴史を跡づけようとしたものだが、改めて振り返ると、現代の子どもたちがかなり変わった環境の中で成長しているのに気づく。

メディアを例に考えてみよう。現代の子どもたちの回りをテレビやテレビゲーム、CDプレーヤー、携帯電話、ファックス、ワープロなどのさまざまなメディアが取り囲んでいる。小学生がパソコンで情報をファイルする。あるいはインターネットを利



用して、外国と情報交換をすることも現実化されつつある。子どもたちの回りに多様なメディアが取り巻き、①「電子メディア」の中で育つという感じになる。

そうした電子メディア時代へのきっかけを作ったのはテレビだった。そして、テレビが子どもたちの身近になり、②「テレビ時代」が到来したのは昭和三十年代の後半からである。「お母さんといっしょに」や「ロンパールーム」などの幼児番組が始まったのがその時代（昭和三十八年）で、東京オリンピックが開催される前年にあたる。

当たり前に思いがちだが、家庭にテレビが入ってくる。そうになると、子どもたちもテレビを通して世界の情報に直接接することができる。それだけに、視野が広がってくる。

テレビ以前に、③「ラジオ時代」がある。ラジオから流れる「コドモの新聞」に子どもたちが聞き入るようになったのは昭和始めである。

そして、それ以前に、④「活字メディアの時代」があり、大正に入ると、子どもたちは『少年倶楽部』や『立川文庫』に熱中している。

そうした活字以前となると、子どもたちはマス・メディアに接することなく、すべてが直接体験の中で生活している。子どもたちの回りにテレビやラジオはむろん、新聞や本もない時代である。



学校の機能低下

実をいうと、この世の中に子どもが誕生して以来、子どもたちはそうした直接体験の世界で成長してきた。

自分の目や耳、足や手でさわったものがすべてである。そうした直接体験の世界の中で系統立った知識を伝達してくれる場が学校だった。学校に行かなければ知識を獲得できなかった時代である。

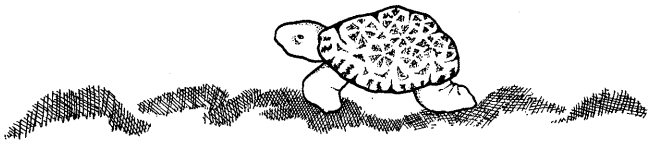
しかし、テレビ時代はむろんのことだが、電子メディア時代に入ると、情報はいくらかでも入手できる。しかし、子どもたちの回りから自然の環境が消え、子どもたちは自分の手や足、耳などを使う機会が減少しつつある。

皮肉な話だが、現代の子どもたちはテレビの天気図を通して天気を知るが、子ども部屋の外へ出て気温を感じようとしない。それと同じように、ポテトフライを食べてはいるが、畑でじゃが薯を見たことがない。

かつては直接体験がほとんどで間接体験が少なかったが、現代の子どもは間接体験の中で暮らし直接体験が乏しい。

それだけに、間接体験のセンターとしての学校はかつての機能を失い、むしろ、現代では子どもたちに直接体験をいかに与えるのが重要になる。

しかし、情報化の到来を先取りする形で、幼児のための情報教育とかで、パソコン



教室を開く幼稚園も登場している。パソコンのソフトの中には「お絵描きソフト」もあるし、「幼児のための英会話ソフト」もある。そうした教材に慣れると、情報化に強くなり、これからの社会に活躍できる人材の要請に連なるといのが歌い文句だ。

筆者は教育社会学を専攻しているので、コンピューターの発達とともに研究生活を重ねてきた。なんとか機種に追いつくと、コンピューターの方がグレード・アップしてしまう。いつでも、コンピューターの発達の後を追う形である。そして、今になると、コンピューターのソフトが開発されて簡単なものになり、折角、習得した技術の大半は陳腐化して、時代遅れのものになった。それだけに、コンピューターに苦い感慨を抱いている。

コンピューターの技術が有効なのは短期間で、すぐに期限切れになる。幼児に情報教育などは不要だ。それより、情報化の進展する現代だからこそ、むしろ、子どもたちには人とのふれあいや群れ遊び、生き生きとした体験などが大事になる。

これからの学校は「知識を伝達していく場」から「友と体験を重ねていく場」への転換が望まれよう。そうした意味では、これまで遊びを重視し子どもの体験を尊重してきた幼稚園の姿勢はますます大事になる。小中学校が幼稚園の教育に学ぶ時代が来ないように思われてならない。

(静岡大学)



保育学文献賞を受賞して②

「子育てひろば」としての

保育園をめざして

新澤 誠治

「下町の小さな保育園」の歩みをまとめて『私の園は子育てセンター』（小学館）と題して出版、幸い、それが一九九五年の日本保育学会の文献賞をいただくことができました。

一園長のたどたどしい実践記録で全く自信がなく、おずおずと世に出させていたただけに、評

価していただいたことをうれしく思うと共に、一つの節目を越えて、また新しい保育園の歩みをするのに大きな希望を与えられたことを感謝しています。

機会が与えられたので、この本ができるまでの経過やこの本にかけた思い、その後、考えていることを少し書かせていただきます。

保育園の曲り角に立って

一九九四年は、ことのほか忙しい年でした。児童福祉法が施行されて五十年、そのももど実施されてきた措置制度が時代に合わなくなったと、抜本的に見直しを意図して保育制度検討委員会が設けられ、改正に向けての論議がされてきました。

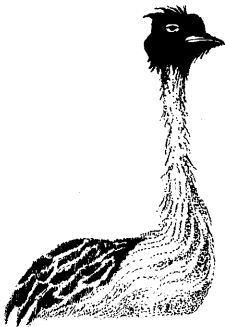
保育界ではそれに対して、公的な保障を崩すものとして、危機感がひろがり、「児童福祉法の精神を守れ」「措置制度を拡充していけ」と反対声明がでたり、集会があちこちで開かれ、反対の声が各地であがっていました。

当時、私は東京都私立保育連盟の会長、全国私立保育園連盟の副会長をしていた関係もあって、その論争の渦中にあり、毎日、保育園を留守にして、研究会、会合、集会にでてこうした論争の渦中にいました。

私はそこで二つのことを考えていました。

一つは、厚生省が措置制度の改正をいう前に、もっと児童福祉法や保育園の果してきた役割を高く評価することがあっていいのではないか。

そのために各保育園が、もっと戦後の荒廃の中で子どもたちの姿に胸を痛め、保育園をつくり、今日の姿にまで築き上げてきた歴史、そこでの子どもたちの成長、親たちの希望、地域の中で子育ての輪をつくってきた、こんな姿を記録し、それを重ねて保



育園が果してきた役割をもっと声を高くして伝えていく必要があるのではないかと思っていました。

二つには、単に制度の改正反対でなく、やはり「いま保育園は時代の曲り角に立っている」という自覚のもとに、保育の現場から家庭、地域の変容、それに対応してきた実践を出しあい、これからの保育園の役割、機能を考え、その主張の上に保育制度を築いていくことが必要だと思っていました。

そう思いつつ、自分がその作業をするとは、全く考えていませんでした。

そんな折、小学館の編集長から、「貴方が今まで歩んできた道、そしてこれからの保育のあり方を本にまとめませんか」と書かれた一通の手紙をいただきました。

私にはとても自信がなく、始めはお断りしましたが、「あなたの四十年間の保育の歩み、そこで『共に育つ保育』『保育園は子育てセンター』という主

張に至ったことを書きなさい」と説得され、先の二つの考えもあつて、書く決心をしました。

難産だった記録

いざ自分が書くとなると、書きたい内容、思いたけは大きくふくらんできて、それをどう書いていいか、机に向かって迷うばかりでした。

私は「保育園の歩みは集団のドラマ」と考えていたので、創設期からの同業者のこと、保育園を共に築いてくれた父母たち、沢山のボランティア、苦勞をかけた家族の群像等を書きました。

かなりの枚数の原稿になって編集長に見せると、敵しい表情で「こんなに沢山の人の名前がでて、その活躍ぶりが書かれても、読者は混乱し、名前ばかり読まされても読者には興味はわきません」と言われ、「もう一度始めから書き直すように」と原稿は突き返されました。

次に「子育てセンター」としての現在の園の姿を書き、自分の保育園や保育園像を理論的に書きまし



▲子どもたちと遊ぶ筆者

た。やっと全体の三分の一位書いた原稿を手渡すと、編集長は「このような抽象的な書き方は面白くありません」「もっと保育園の歩みの事実と、あなたの思いを書きなさい」「それも何を言ったと言うような活動の羅列ではだめです。もっと失敗も含めて、素直な気持ちを書いてください」と、温和な顔は崩さず、でも断固とした調子で突き返されました。

私は意を決して、「私」という一人称で書くことにし、一九五五年（昭和三十年）、大学一年生の時のスラムの子どもたちとの出会い、その時の驚き、街全体に漂う雑然とした感じ、生活の匂いや音、子ども一人ひとりの表情、若い心の痛み、躍動を思い出し書き出していきました。

こうして書き出すと不思議なもので迷いの糸が解かれ、混沌とした経験や心の軌跡、若い時の夢、社会に対する怒り、保育にかける理想等、長年の思い

を吐き出すようにスラスラと書いていきました。

まだ学校を出たての青年がただ理想の旗を掲げての仕事は、直に壁にぶつかり、立ち往生し、人間関係や経済的な挫折、そこを乗り越えたと思うと、また大きな壁、そんな試行錯誤の連続でした。そのなかで、多くの人の助言、協力を得て、人の輪や事業をひろげてきた四十年、表面の出来事の奥に潜む、保育園の歩みの精神の鉾脈が見えてきました。

それにしても、脱稿して間もなくの脱力感は強く、大量の吐血をして、入院、静養をしばらくする等、文字どおり私には、血を吐く思いの難産をして、生み出したものでした。

「子育てひろば」としての保育園

私は作品の最後に、各地の実践を交換しあい、次代の保育を共に考えていきたいと思います」と訴えたのですが、多くの保育園から共感や様々な意見が寄せら

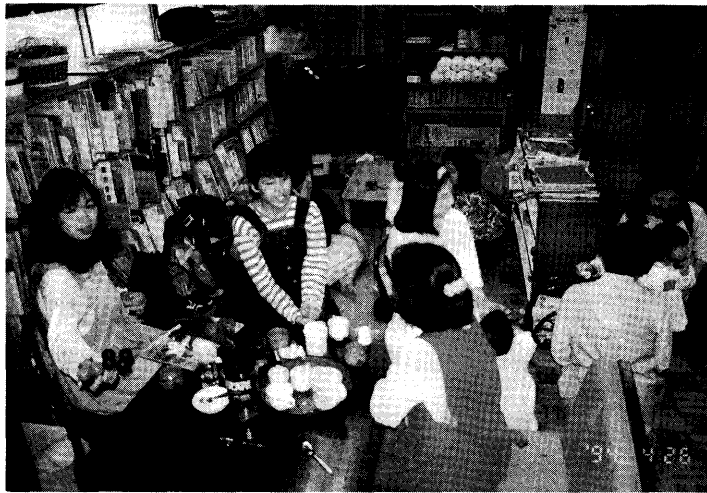
れ、保育のネットワークがひろがったことを感謝しています。

現在、神愛保育園は「子育て支援センターのモデル保育園」となり、三年目に入っています。

定員七十三名、産休明け保育、延長保育、障害児を受け入れての統合保育を展開している上に、子育てセンターとして、毎日の育児相談をはじめ、地域のお母さんが子連れで自由に参加できる子育てサロンや母親講座、メンバーを固定してのたんぼ教室、子育て情報誌「たんぼ通信」、保育室を開放しての「一日保育」等をしています。

毎日、園舎から園児の声と共に、地域の子どもの声、母親の姿や声も弾んでいます。

ただ、こうしてプログラムを並べると、子育てセンターが保育に特別の活動を付け加えたもの、プログラムの展開ととらえられたり、いま厚生省の政策メニューに乗っての事業とだけしかとらえられない



▲「子育てサロン」に集うお母さんたち

ことが多くあります。

中には、「新澤さんは厚生省が『子育て支援センター』というのに迎合して、にわかには始めたのでしょー」という批判を受けて、驚いたこともありません。

私が「保育園が地域のセンター」といったのはもう、十数年前のことであり、また「地域に根ざした保育園」「子どもを主人公とした環境を通しての保育」「共に育て、共に育ちあう保育」をめざして、保育内容を見直し、園運営を問い直し、そして母親の育児不安のひろがりに「保育園は地域の子育てパートナーに！」ならなければと決断し、こうしてたどりついた考えが「子育てセンター」であり、保育園の試行錯誤の歩みの到達点と思っています。

保育園がもっと地域に親しめるものに

私の本は一九九五年の三月に出版されましたが、

その少し前に「保育問題検討会報告書」が出され、措置制度の改正問題は両論併記の形として一段落、そして続けて国の基本政策として、「エンゼルプラン」が出されました。

そしてまた、「児童福祉法の抜本的な見直しを！」と児童福祉審議会がもたれ、これからの保育園、制度のあり方が論議され、保育園の今後が課題とされています。

私はこれからの保育園の課題として、親しまれ、信頼される保育園になることだと思っています。

「子どもが生まれたらまず保育園に知らせよう」

「保育園で子どもの誕生をみんなで祝い合おう」

「何かあったら保育園に相談にいきよう」「地域の問題を保育園で話し合い、みんなで解決していきよう」

というように、地域の中で身近な存在になっていきたいものです。

いま、保育園は門を開き、敷居を低くして、気軽



に足を踏みいれ、保育園の園長や主任、保母とことばを交わすことができる施設になることが求められていると思います。

そのために園庭開放から、時には保育室の参観や開放、行事への参加、園の講演会、サークル、運営にも母親が参加の機会をもつ、こうしたことの積み

重ねの中で、保育園が本当に国民のものになっていくのだと思います。

もう一つは、保育園がもっと自由で創造的なものになることを願ってやみません。

質のよい保育とは何だろう

講演会での質問や各地の保育者の反響の中で「地域の子育てのパートナーと言っているが、いま、入园している措置児の保育が大切ではないか」「保育園の活動をひろげること、それだけ保育の質は薄まっていくと思う」「保育の質を高めていくのが保育者の責任」と、こんな意見が多くあります。

私はその「質の高い保育とは何だろうか」と問い返します。今までは保育園、幼稚園は家庭、地域の中に教育機能が豊かにそなわっているという前提の上で、保育園、幼稚園内の保育が考えられ、保育者と子ども、子ども同志の關係に収斂され、展開さ

れてきたように思います。

私は「子育てセンター」ということばをさけて、「子育てひろば」という言い方をしていますが、今まで保育は保育園内で自己完結してきたように思うのです。

保育は保育者と親との共同の作業、保育園は地域の自然、文化とふれあう「ひろば」と考えるのです。

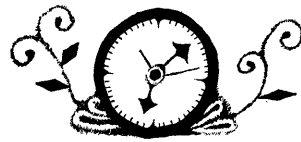
「子育てひろば」としての保育園は、私の保育宣言であり、これからの保育を考える、一つのキーワードだと思います。そうした意味でいま、保育園自身も曲り角にたち、これからの時代の保育を創造していきたいと思えます。

(神愛保育園)

子ども時代と私(4)

満州開拓団の引揚者の子

黒岩 卓夫



私の家族と開拓団

私は一九三七年生れの「子ども戦中派」である。小学校二年の夏、日本は戦争に敗れた。

私の小学校は、「長興青葉在満国民学校」という一寸変わった名称である。在満とあるように満

州（現中国東北部）の開拓団の日本人学校である。生徒の数は全体で一〇〇人程度だった。

私の家族は父母、兄（小五）、妹（六歳）、弟（四歳）との六人で、姉は二人いたが長姉は朝鮮に嫁いでいたし、次姉は女学校在学中で日本に残っていた。



私の父は農民として渡満したわけではなかったが、父は信州の農家の次男であった。母を五歳で亡くしたがその母が遺言で二一にいも（父の名前）を医者にしたと言つて死んだといわれている。そのためか父は小学校卒の身でありながら医者になる道を求めつづけた。

その願ひは満州開拓団だけに通用する医者（正式には保険指導員）になる形で実現した。確かに開拓団での父は、子どもの私の目にはまぎれもない医者として映った。

白衣を着て聴診器をもって患者をみていたからである。

しかしながらこうした父の夢はわずか三年で水泡に帰した。

昭和十七年に単身赴任し、財産を処分して翌十八年に家族をよ

びよせたが、敗戦によつて満州帝国が崩壊するにいたつて、満州侵略の尖兵でもあつた満蒙開拓事業の、その一端を担つた父の「医者」という資格は、水泡のごとく消えてしまつた。

父はなつかしい故郷に戻つた時、またふつうの人に戻つたのである。

私たちは昭和十八年七月、現黒龍江省の勃利市から十里ほど奥まつた「佐渡開拓団」に落ち付いた。その後隣接する鹿島台、耕野開拓団（宮城県）に移つて敗戦を迎えた。いや正確には二十年八月九日午前〇時、ソ連参戦の日までこの開拓団の小さな病院に住んでいたのである。

八月九日の夜、私たちの逃避行がはじまつた。

そして翌二十一年十二月末に日本に引揚げ、私の日本での生活が再開された。そこは、長野県北安曇郡美麻村大字高地小字屋敷平という三軒の部落であつた。そこは父の生家であつたから私に

とっては伯父さんの家に一家がころがりこんだのである。まさに引揚者というやっかい者になっていた。

私は美麻南小学校の高地分校（三年生まで）の三年生の三学期に編入された。四年生からは本校に行き、そのまま美麻南中学校に進学した。

悲しみは喪なわれるのだろうか

急激に訪れたパニック、ぬきさしならぬ危機は子どもにとっては何だったのだろうか。

開拓団はソ満国境からわずか七十キロメートルの位置にあった。ソ連参戦のその日の夕方から、すでに東方の夜空には、ソ連軍の砲火の閃光がせまっていた。徒歩、無蓋車、空襲、野宿、伝染病、飢餓、満州人の反乱、ソ連軍の略奪の中、私の弟は九月、妹は十月に死亡した。

父は団の責任者として家族とは全く別行動をとっていた。従って母は四人の子を連れて持てるだけの物を持つての逃避行であった。

弟は他人の背中におぶわれたまま、「ミズ、ミズ」と叫びながら死んだ。

妹は収容所で、「リンゴを食べたい」と言いながら飢え死んだ。

私はまだその頃は元気だった。収容所はハルピンの桃山小学校だった。私は毎朝、トラックに死体が山積みされて、どこかへ運ばれて行くのを黙って眺めていた。十月九日の朝は妹の小さな亡骸もその中に入った。

妹はとても可愛い女の子だった。その妹が骨と皮となり、背中や腰に床ずれをつくり、生きながら体の一部が腐っていく中で、いたいいたいと泣いていた。

後で知ったことだが、この頃は母も神経に異常

をきたしており、物を考えることができず、目もよく見えないような状態となっていた。おまけに父は発疹チフスにかかり、どこに生きているのかも不明となっていた。

私はこの弟や妹の死をどう受け止めたかよくわからない。今は思い出して涙を流すが、当時は悲しんだという記憶がない。ましてや泣いたという記憶もない。たくさんの死体がトラックで運ばれる光景も、単に事実として記憶しているだけだ。私が非情だったのか、感情を忘れていたのか、子どもってそんなものなのか自分では判断ができない。このことはずっと私の心に異物としてありつづけている。

私自身はその後発疹チフスにかかり生死の境をさまよいながら延命し、記憶が再び復活するのは十一月の半ばをすぎたからであった。

学校がなくなったこと

ハルピンの街角にたむろしている「少年団」の一員に私は兄と共に加わっていた。少年たちははめいめにズタブクロをぶらさげていた。街路はゆるやかな坂道となっており、大型トラックが時々黒煙をあげて坂を登っていった。

その積荷の多くは石炭や薪の燃料だった。実はたむろする少年たちはこの燃料をねらっていた。一台のトラックが石炭を積んでやってきた。上り坂にかかるトラックをねらってワーンと少年たちが追いかけた。坂半ばでトラックのスピードが落ちる。そこで荷台の後にしがみつくようにして石炭の塊を奪うのである。うまくいけば大人の顔の大きさもある石炭の塊を荷台から落とす。落ちた石炭はパッと碎けて街路に飛び散る。それを低学年の少年たちが我先にと拾いズタブクロにつめる

のだ。

これは親を助ける大事な仕事であったが、同時にスリルのある遊びであった。

私は小学校から大学まで十八年間学校生活を送った。しかし考えてみるとこの満州での逃亡期間、約一年四か月は学校へ行かなかった。行きたくても学校がなかったわけだが、自分としては貴重な経験だったと思う。

現在は学校があっても行けない不登校児が大問題になっている。それと逆の関係の中で子どもたちは、いや自分はどう生活してきたのか改めて回想してみるのも面白いのではないだろうか。

記憶をたどるわけだから正確ではないが、学校へ行きたいと思わなかったというよりもやらねばならないことがたくさんあって、激変した環境に適応することに子どもながら全神経を集中していたのだと思う。

食べるということが大

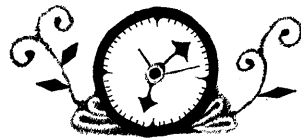
人にとっても子どもにとっても最大のテーマであったから、食べるために生きているような観念にとらわれてしまう。

石炭や薪を奪うこと、

時にはマーケットから盗むこと、有用なものは何でも拾うこと、野草でも

食べられるものは徹底的にとってくるのが習慣になった。街角や空地に生えているタンポポ、オオバコはごちそうだった。

一日に一度はゴミ捨て場に行つて物をあさった。こうしたことは修身に反することであったが、あつという間に新しい倫理観まで身につけてしまう。これが新しい「学校」でもあった。





もつとまじなこともやった。母と一緒に物売りに繁華街にでかけて行き、街角でせっけん売りをやった。ハルピンの冬は寒い。こごえる手足に耐えながら声を出して買って下さいと呼びかける。

おそらく母一人より小さな子を連れての方が同情心をかけて売れ行きがよいとの思惑があったのだろう。しかしさっぱり売れなかった。それだけにたまに買ってもらう時のうれしさは忘れられない。

いや本当の勉強もしたのだ。

アパートの前任人が物置に捨てていった本を見つけたことである。少年向けの雑誌があった。

開拓団では見たこともないものであったから、むさぼるように読んだ。そのうれしさは強烈なものだった。

また、たまたま少年向けの細菌学の単行本があった。これは完璧に暗記するほど読みこんだ。このとき、ビールスとかリケッチアという微生物を覚えた。今でも頭脳に残っている。

また隣にブラブラしていたおじさんがローマ字を教えてくれた。これもすぐマスターした。ロシア語や中国語も片言は覚えることもできた。まさに好奇心さえあれば、全てが学校になったのである。

自分がおとなになる恐怖

モラトリウムという言葉が一時流行した。なかなかおとなになりたがらない青年のことをさしている。

私は戦後の日本の農村で、土地も家もなく、親に職業がない中学生のころ、とりわけ三年生とし

て自分の将来をきめねばならないころ、自分はど
うしたら食べて行けるのか、何か職に就けるのだ
ろうかという恐怖感にも似た不安におびえてい
た。

高校へ進学するかどうかも大問題だった。この
ころ何かの書類の父の職業欄に「無職」と記入し
たときの無力感も忘れられない。私が高校二年ま
では父は無職だった。

たとえ無職の親の元でもなんとか元気に生きて
いることが無上に幸福にさえ思えるという身分で
もあった。おそらく心理学的には社会的に力のな
い父、貧乏な家が子どもに不安感を与えていると
同時に、親に頼れないということが、一種の神経
症にさせていたと思う。

高校は当時近くの町の病院で看護婦をしていた
姉の援助によってなんとか進学することができ
た。しかしこの神経症から抜け出るのは、大学に

合格した時だったと思う。その時はじめて自分は
なんとか自分の力で生きて行けるぞと思ったので
ある。

長興青葉在満国民学校約一〇〇人の生徒のうち
十五人が生きて帰国した。その第一回同窓会が三
年前にもたれ、私の担任だった女の先生も参加し
た。戦後五十年目の再会であった。そして今年の
九月には、同窓会でその開拓の地を訪れることにな
った。追憶と追悼の旅である。戦後は終ってい
ない。このことを改めて訴えたい。

(新潟県浦佐萌気園診療所医師)

参考書 『医者之父から七人の子どもたちに言いたい

こと』黒岩卓夫 教育史料出版会



手を使うこと

—— 未来を開く ——

津守 真

具体的な子どもとのかかわりの根底には、行き詰まり絶望しそうになった世界に立ち向かう自分の姿勢が問われている。人との出会いにおいては、人間を越えた存在とのかかわりが、ひとつひとつのかかわりにあたっては、表現をいかに理解するかが問われる。それは保育以前にあり、また、保育の中で鍛えられる。それをも含めて語ることによって保育者の全体像が明らかにされると思うので、敢えて、それをいれて語ろうと思う。保育者としての私を励ましてくれるものには、同僚の保育者、家族、友人あるいはまた、思想、読書がある。その仕方は人によって異なる。私は自分を支え



てくれる思索をそのままに記録の裏側にある同時期の日記から記すことにする。それによって人間の営みとしての保育が一層明瞭になるだろう。

新学期にあたっての日記の断層より

新たな学年の出発は、未知の世界に向かっての新たな冒険の出発である。ゆくて遙かな地平線の彼方に、障害をもつ子どもの保育を通しての人間世界の理解がある。保育と子どもの世界を明らかにするという明るい光がある。

自分の手で食べる

新学期になって最初の日、T夫は砂場でカセットの穴に木の枝をさしこみ、砂の上を動かしていた。自動車の車輪のつもりだったのだろう。私がT夫の手を砂に埋めると、すこしずつ指を動かして砂から外に出した。指が出てくるとクツクツと笑った。自分自身が顔を出したように思えたのだろう。何度も繰り返し返した。

これまでT夫は弁当を出しても食べなかった。T夫は家でも母親が食べさせていて、自分の手で食べることがなかった。この日、私は「お母さん、せっかくお弁当を



作ってきたのだから食べさせて帰ったら」というと、母親は砂場に弁当を持ってきた。T夫はすぐに手を出した。母親は「あ、その手洗わなくちゃ」と言いつて、弁当をひっこめた。こういうことが二、三度あった。そして子どもの手を引いて部屋にゆき、手を洗って食卓に座らせた。もうT夫は食べようとしなかった。私は「さっき砂場で手を出したとき、砂がついていても手で食べさせればよかったね」というと、「あ、そうですね」と母親はそのことに気が付いた。母親が夫の新聞を守りたいと思い（前号P.8参照）、また、手を洗わねば食べてはいけなと一途に思い込む姿には愛すべきものを感じる。しかし真面目さの反面には子どもにとっていま大切なものを見落とす恐れもまたひそんでいる。

その翌日、砂場のわきに食卓を出して弁当にした。皆が庭で食事をはじめたがT夫は水たまりの遊びをつづけていた。急にやめて私の手を取り、庭の水道に手を洗いにいった。そして私の隣にすわり、私の弁当をほしがった。自分の弁当の小さなのりまきも私の弁当箱に移して私に食べさせるように指示した。

翌日、箱積み木を私に持たせ、次々に四個並べて床に置かせた。T夫はそこに腰掛け、一本の積み木を開閉ドアのようにあけたりしめたりして遊んだ。弁当のときも積み木の上で食べた。もう少しで自分の手で食べそうだったが、私に食べさせるように



指示した。

数日後もF先生と輪のなかに入ってくる回る遊んだ。昼食のとき、自分の手でいちごをホークでさして食べた。F先生がホーク入れの容器にのり巻きをくわえさせる時、手で取って自分で食べた。残りは帰りがけに自分で食べた。自分の手で食物を食べた最初である。

切ること——造形のはじまり

五月の朝、机の上に割箸が出ていた。私はそれに新しいビニールテープを通して動かした。T夫はすぐにテープを引き伸ばし、自分ではさみを引き出しから出して切った。床の上に画用紙をひろげるとその上に貼った。どこをどの長さで切るか、はさみを動かして見当をつけている。縦に貼ったり、対角線に貼ったり、何本も重ねてゆく。私はそれを壁にはった(図1)。それから、T夫は、はさみを紙の縁にもってゆき、何度もためらった後、切り込みを入れた。つづいて紙の縁にいっぱい切り込みを入れた。T夫はそれを手に持って動かしていた。縁に切り込みをいれると、画用紙全体が回転しはじめ

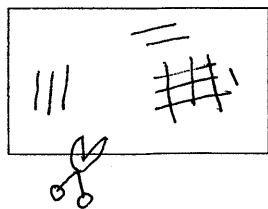


図 1



る。

この日T夫は自分の手でテープを切ったこと、自分の判断と決断で、長さを決めて切ったこと、それを好きなどころに思うように貼ったこと、形にならないが、自分で位置を決めて貼ったこと、結果としてはテープが幾重にも重なって貼られ、縦の線や横の線も作られた。これはT夫の意識的な造形行為である。

心のゆとり

午後になって、T夫は庭にゆきかけたり、うろうろしていた。これまでひとつのことにとらわれていることが多かったT夫が目的なく歩き回るのは、心のゆとりを示すものと思われて、私はうれしく思った。しばらく後、T夫は私のひざの上に座り、ゆっくりと外を見て過ごした。静かなひとときであった。

手を開く

秋の学期になって、T夫はいつも母親と一緒にいることを求めた。両手の拳を握っていることが多い。親指を人指し指と中指の間から外に出して握っていた。硬く閉じた殻の中から自分をのぞかせているように思われた。私がブロックをセロテープで貼っていたら、そのセロテープを自分の手に巻き付けて、手が開かないようにした。



手を使わないぞと決意しているみたいであった。三週間ほどその状態がつづいた。十一月になって、F先生とホールを走り回った後、新聞紙に手のひらをあて母親とクレヨンで手をなぞっていた。F先生がそれを切り抜き、袖口につけてあげた。手が開いた。T夫が私の手をとった、その手が柔らかい。

この日、T夫は母親からはなれて、ほかの子どもたちと一緒に滑り台の上で過ごした。

翌日、F先生はボール紙で手のひらの形を作った(図2)。T夫はそれをもって母親と滑り台の上にはずき、しばらくじっとしていた。それから手に持っていたボール紙の手を下に落とす。何度も落とし、母親が拾って来たり、自分が拾いにいったりした。手を放すという文字通りである。それから母親の手をつないでぐるぐる回転した後、ボール紙の手を床に置いてつくづく眺めていた。ずっと後になって私はF先生に、ボール紙の手を作ったとき何を考えていたのか尋ねた。開いた手がもうひとつあったらどんなにかいいだろうと思っただけのことだった。実際、T夫はボール紙の手を手放して、自分の手を開いたのだった。

私は、保育者がこういう保育をしたから子どもがこんなによくなったという考えはとらない。この子どもとこういうふ



図 2



うに工夫してかかわったら発見があつて面白かつたというように考える。前者の考えには因果論の残滓があり、自分の力でこうなつたとおごりに結び付きやすい。ひとつの小さな成長にも多くの人がかかわっている。そして何よりも、子ども自身の選択と意志が育てられることによって、確かな未来が開かれる。

この頃の日記の断想より

私は子どもそのものの存在、人間そのものの存在の中に夢想としてはいりこんでゆくのだ。子どもを対象として動かそうとするのではない。その存在そのものの中にはいりこんでゆくのだ。自己実現とは、外から言った言葉だ。保育は子ども自身の中に湧きいづる思いを生み出す仕事である。

ガラス細工のような

若い心に接して

小島 直美

日々の電話相談を通して現代の子どもとその周辺について、と、この連載のご依頼をいただいて一年、子どもの成長に伴ってのさまざまな事を一緒に考えていただけたかと思えます。

最終回となる今回は、思春期、青年期、あるいはそれ以後の人たちからの、“人間関係”にかかわること、社会の中での自分の生き様など、人間として自己

に向けた深い悩みの相談から学ばせていただいたことをお話ししたいと思います。

自らを肯定しておとなになっていくむずかしさ

人の第二の誕生と言われる思春期、青年期にとって、自分とはいったい何なのか、向きあうことは大切な課題です、私はどう生まれてきてこれからどう

なっていくのか、他人から見た私とは何なのか、その他人とどんな距離をとりながら近づいていったらいいのか……。今あるがままの自分を肯定し、自らの人生として自分を引き受けて生きていこうとする決意が必要な時期なのでしょう。

女子高校生（二年生）の不登校相談

初めは母親からの相談で、娘が高校入試の発表の日から友だち関係のことで悩みだし、落ちこむことが多かった。友だちに対して自分が表現できない、言葉を深く考えちゃう、友だちが輝いて見えるのに比べて自分はひとりですんでいると訴える。学校も休みがちでそろそろ単位が心配。

母親からの四回目の電話の時、本人が電話口に出る。

高校にいと一時間一時間が重苦しい。でも家にいると「あとどれだけ留年だよ」と言われることにおびえる。夜、明朝母親に学校に行きたくないと言って

いる自分の姿を想像すると、明日はすつと行けるといいなと思う。

みんなができていないこと、普通のことができない自分がなさけない。そんななさけない姿を友だちに見せているだけでみじめ。しっかりした人間になりたい。

父が死んで（本児が中学生の間、父親が闘病生活。

中学三年で亡くなっている）、母が苦勞しているのもわかる。それなのに自分がこんなで母を心配させ、母も子どもの管理が悪いと周囲から決めつけられていることもつらい。私が先生に母が無職だと言っただけで再婚したのかと思われたことも、私は「家」を守れていないんだな、と思ってしまう。

具体的には友だちとの手紙のやりとりや、サークルの金銭面のトラブルのことなどをこまごまと話してくれました。

女子高生にはよくあるちょっとした誤解やすれ違いが、彼女の場合はどんどん溝を深めていってしまうよ

うです。自分に自信が持てず、小さな出来事が大きな傷になっていく痛みが、一時間半に及ぶ彼女の話を聞いていて伝わってきました。こんなに自分のことを聞いてもらえたのは初めて、と明るくなってきた口調で語ってくれましたが、父の死という過酷な分離体験をした彼女が、自分を立て直していくのにはまだ時間がかかることでしょう。

男子高校生（二年生）の進路適性相談

やはり初めは母親からの不登校相談。二か月位たって本人が直接四回にわたって電話をしてきた。

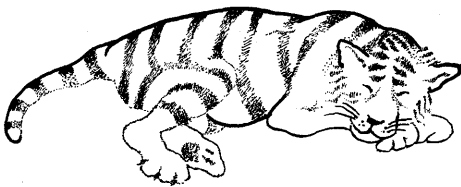
もう高校はやめる。中退を決めた。今、学校の先生に電話をして「さっさと退学させてくれ。あんたは教育者として失格だ」とかなり言いたいことを言ってしまった。もう学校からかかってくる電話にびくびくしないですむ。大検をとって受験すればいい。

今までの自分が嫌、完全に過去のことを忘れない、白紙に戻したい、いつまでも引きずってたくない。

人が幸福か不幸かは自分の感じ方。どうころんでも学校生活ですばらしい人生はありえない。ひとりである幸福と大勢でいられる幸福では後者の方がレベルは高いのか。でも今はひとりでいられる幸福はある。今まではそれ以下だった、いじめられもした。いじめは戦争よりひどい、戦争は敵もいるが味方が必ずいる。いじめはひとりつき

り。
電話をしたのは今不幸だからではない、話をしてみたい。人間と話したい。いつも自分で自分に話しかけているだけ。自分にも人間は必要なのだと思う。

相談員は相談を受ける側の方が上、という



意識はないか。心理学は人間を輪切ってみる。人の心を決めつける。ひとりでいることはそんなにいけないことか。人間はひとりでは生きていけないといっしょくたの言い方しかできないのか。

今の自分はひとりであることが安らぎ。今は孤独を認める人となら手を結べる。ニーチェを読んでいるが共感できる。ニーチェとなら友だちになりたい。

ただ、本当の意味では人間はひとりではいられないとは思っている。社会にまったく必要とされないいのだろうか。そのためには大学に行かなくてはと思う。でもその大学も自分の確信する力以外の偏差値などのものさしで誰かに認められたいと行けない。

本当は、対人恐怖症だと思う。一步も外へ行けない。口べたで話せない。感情の起伏が激しくカーッとなつては友だち関係をこわしてきた。じゃあ無口でいようと押さえれば暗いヤツといじめられた。人の言葉を信じられず勘ぐってしまう。被害妄想と言われる。いろいろと考えると堂々めぐりで、生きていけないの

ではないかと自殺を考える程落ちこむ時もある。

揺れ動く心の訴えはまるで幼児が駄々をこねているようでした。時に激しい怒りをぶつけたり、逆に急に自信をなくして甘えるように弱さをさらけだしたりしていました。不安定な心に添うように一生懸命耳を傾けました。

しかし、電話相談、しかも、子ども、テレホン相談なんかに相談することは、彼のプライドが許さないようでした。わざわざ「明日電話がなかったら僕の中で解決したと思ってください。明日を境に悩みをシャットアウトしたい、ジ・エンドにしたい。そっちからもそう思ってもらいたい」と宣言して、その後本人からの電話はありません。

母親からの相談は続いていて、それ以後も迷いの続く日々を過ごしている様子です。あの時の本人との会話の中でもう少し何かができていけば、と悔いの残る相談です。

大学生になっても「生き方」の不安を訴え続けた相談

初めは「背が低くて悩んでいる」との主訴。他のことは努力すればなんとかなるのに自分の力ではどうにもならないことが悔しい。太っていれば痩せられる、バカって言われれば勉強すればいい、以前テレビと言われたことがどうしようもないことだから悔しい。

きちんとしたことが好き。やったことがその分実績になることがよい。武士道の潔さ、戦前の価値観がひとつしかない世界に憧れる。男なら高倉健、女なら吉永小百合、今の女の子はだらしなくて嫌い。お酒も人間をだらしなくさせるからよくない。人生「適当な」つきあいをしていかななくてはならないから自信がない。

と、やはり人と普通につきあうことができずに悩んでいる浪人生からの電話相談でした。この人とは、三年半の長いおつきあいでした。受験勉強中のスランプ、受験中の緊張や一喜一憂、大学生になって新しい人との出会いの不安、サークルでのつきあい方等、そ

の時々には彼独得の強迫的な価値観と現実との接点を探りながら話しあってきました。運転免許証取得の課程でも臨機応変の苦手な彼は車の流れに乗れず苦勞しました。何のための交通法規か、と悩みました。アルバイト先での予想のつかないことへの対応や、仕事間のことでも自信をなくすことがしばしばでした。性の悩みも、異性への思いも語りあいました。異性への潔癖な憧れや清く正しく美しくあるべきとの夫婦のイメージの一方で、身の内から沸きおこる性の衝動、許しがたい性風俗なのにそれに刺戟され引き起こされる我が身の快樂。

ほどよいあり方や、ある意味で「良い加減」のふるまいのできるものが、おとなになっていくことなのだと、彼の日々の悩みに伴走したことでしみじみと実感できました。

この時期の悩みを訴えてくる若者の、本当にもろいこわれやすいガラス細工のような心に接していると、遠い日の我が身を含めて、おとなたちは皆よくこの時

期をクリアしてきたと感激してしまいます。いいえ、むしろやり残してきた部分も多く、今もなお悩みを抱えることがあるからこそ、人生は苦しくとも豊かに思えていけるのかも知れません。

砕けた心にも寄りそって

そんなもろい心がひび割れてしまったり砕けてしまった人々からの相談も電話相談には多くあります。精神の病いを抱えている人たちは、現実の世界でなかなか人に受けいれてもらえずつらい思いをします。電話という非現実も許されてしまう所で彼らなりの現実（妄想をも含めて）を語り、それを受けとめてもらえることで本来心の中にある不安を理解してもらえたとの実感が得られるのかもしれませんが。

方向感覚がなくなったと訴えた女性

東西南北が混乱、立ち往生してしまう。建物の中にはいると東側と思っていた方が西側になってしまいパ

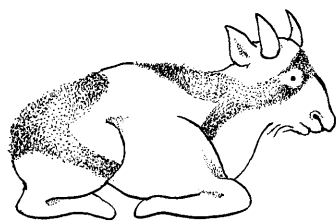
ニックになる。育った土地では方向や地図の説明の時、必ず東側とか西の方へとか言っていた。そのせいか曇りの日でも東西南北の感覚だけはよくわかり頼りにできる感覚だった。今それがくずれて不安になっている。長年勤めていた会社で転勤を言われ、通勤時間が長くなったり人間関係が大変になったりした。その頃から線路の南にあったビルが北に移動して混乱がはじまった。自分の家の中でも自分の寝る場所の枕元だけ磁石がきかない。霊のしわざかもしれない。結局仕事もやめ、今森の中でどっちに行ったらいいかわからない時のような気持。元に戻れるのだろうか、いつ戻れるのだろうか。

その他にも「自分の臭いが家畜の臭いのように家から漏れでてまわりの人に嫌われている」「マスコミが自分の悩みを取りあげてくれた僕のことをテーマにした曲がつぎつぎに発表された。マスメディアと自分の関係はうまくいくが、現実の人間とはうまくいかな

い」など、相談員がどの部分に共感を返しているのかとまどう相談もあります。しかし精神の病いの発症の時期が青年期に多いこと、誘因が青年期の課題のつまずきとの説も多いことを考えると、その心のもろさ、人とのつながりの不安への共感を持って聴くことが、相談してくる人を支えることになるのだと思います。まさに方向感覚をなくしたという女性の言う、自分はこのからどうなってしまうのだろうとの不安なのでしょうから。

暖かい関係をめざして

電話相談員としてたくさんの人たちのご相談を受け、むしろ私の方がいろいろなることを学ばせていただきました。特に今回のテーマである「人間関係」の大切さは、どん



な内容の相談であっても、相談してきた人と私との間に育むべき課題でもありました。

悩み苦しんでいる時、不安を抱えている時、自らを肯定的に認められない時、「そんなあなたでいいんだよ、今できている何かを認めていこうよ、あなたをわかってもらうから、立ちどまって行く先を考えるあなたを横にいるから」と暖かく寄りそえることを心がけてきました。

子どもたちが、いえおとなも、人間として育っていくために、多くの人と豊かな触れあいがあってほしいと願うのですが、身近に暖かな触れあいを持っていない人にとって電話相談は大きな手助けになれると信じて、これからもよき相談者として精進していきたいと思っています。

(元神奈川県横須賀児童相談所電話相談員)

震災後の子どもたち (11)

わすれないあなたのことを
わすれないあのひのことを



森谷 恭子

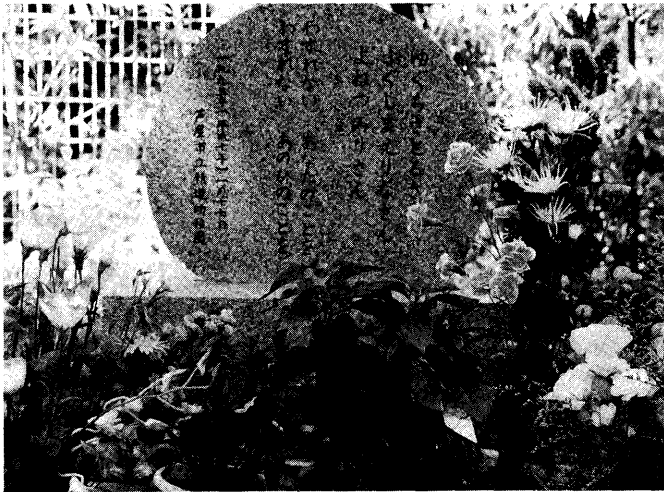
はじめに

表題の言葉はこの度の大地震で亡くなった園児
三人の名前と共に、忘れられない悲しい出来事を
何時までも語り継いでいきたいと、記念の碑に刻
まれているのです。

高さ五メートルの石垣が崩壊し修復された園庭
の一角に、幼稚園が大好きだったMちゃんのご両
親が思いを込めて建てられました。周りの花壇は
職員の手作りで、季節の花が咲いています。毎月
十七日にはご両親、孫の成長を楽しみにしておら
れた祖父母様や知人の方が花を手を訪れられま



▲記念の碑に石を献じて（一人一人絵を描いて）



▲記念の碑に刻まれたことば

す。

一年半が過ぎる七月十七日には、友だちのT

ちゃん親子も久し振りにたずねてくれました。次の日の朝、みんなの思いを感じながら碑の前に佇

んでいると、私の後ろに園児が二人静かに立っています。一緒に碑を見ながら、十七日が毎月巡って来ること、Mちゃんに会いに来られる方のことを話しました。幼い心にしみこんでいくものを、だまっとうなずく姿に感じとりました。

楽しさ広がる芦屋川

幼稚園から徒歩一分程の所に芦屋川があり、四季の自然に触れる楽しい遊びの場所として、園庭の延長のようにして足繁く通っていました。園児たちが成長した時、幼児期の体験がなつかしくよみがえってくる心のふるさとのようになることを願っているのです。感じる心、生きる知恵までも育つ素敵な環境です。

芦屋川は、地震で護岸の石垣や柵が崩れてしまい無残な姿になりましたが、川岸に続く松並木はびくともせず、年輪を重ねたくましい力を空に向かって広げていて、根を張って育つ力の強さを

震えるような思いで眺めたのを思い出します。少し川上へ進むと桜並木に変わるのですが、春、蕾の紅色の初々しさに命のほとばしりを感じました。そして、淡い色の花が重なり合い寄り合って満開になった時、巡る季節に出合えたことと、帰らぬ命への思いと、涙が流れて止まらなかったことも忘れられません。

川の修復工事が進められていましたが、ようやく今年六月に河川敷へも降りられるようになり、待ち兼ねたように遊びに出掛けました。

虫の好きな子はよもぎの葉を這うてんとうむしに目を凝らし、もんしろ蝶を追っ掛けて走り、びーびーと鳴るからすのえんどうを探し、クローバーの冠作りを教わり、高い石垣から飛び降り、友達と手をつないでいることだけが楽しい子どももいて、それぞれが楽しんでます。帰り道に「先生、芦屋川って楽しいね。虫もお花もいっぱいだから」と話してくれた子に、芦屋川大好ききの



▲芦屋川で水とたわむれて遊ぶ子ら

気持ちをうれしく思いました。

暑い日が続くようになると、今度は流れの中で

水遊びです。虫の好きな子はやはりあめんぼうさがしに夢中です。木の葉をくると巻いて舟を作り、流れる速さやよどみに集まる様子に歓声をあげたり、友達と手をつないで流れに逆らって進んだり、回を重ねると自分たちの楽しい場所へ一直線です。流れに用心深くこわごわ足を運ぶ子にそっと手を添えて一緒に歩くと、安堵の顔になっていく様子もほほえましくなります。担任からの報告にも「友達との関わりが自然に広がり、虫やかに輝く目がまぶしい」とあります。保護者にも、川遊びを楽しむ子どもの姿をせっせと紹介しています。

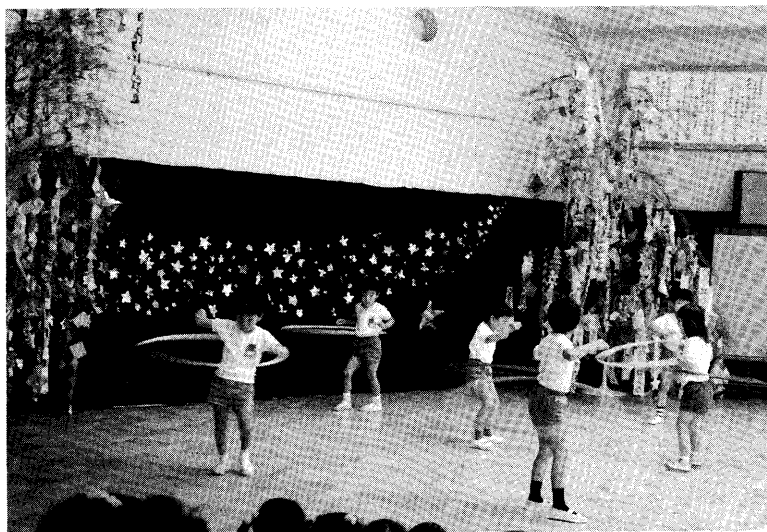
「命」語り継ぎたい

地震で亡くなったMちゃんの家の庭に花や野菜が育ち、美しいものや優しい気持ちを大切にしておられました。たくさん芽が出たのでとえんどうの苗が届き、保育室の前で育て実が採れてみんな

で分け合って食べました。種用に残したえんどうは、地震の後、Mちゃんのいない家で再び発芽して苗が幼稚園に帰って来ました。お父さんが、「Mのえんどうを育ててください」と園児に話され、一人の子が「はい、わかりました」と答えました。えんどうが再び実り茹でて食べた時、「Mちゃんが応援してくれたから」とがんばって食べる子もいて、Mちゃんはずっとクラスの友達です。

震災で兄を亡くしたUちゃんの家庭に五月、男の子が誕生しました。若い夫婦が悲しみから立ち上がる姿を感じうれしい思いでした。出産が早くなりそうだと聞き今日か今日かと待っています。ある朝Uちゃんが「生まれた」と行ったので、側で聞いていた友達のお母さんが「今日はUちゃんの家は、お弁当が作れないから私が代わって作って来ましようか」と申し出があつた程です。「今日ぐらいかも……」が「……生まれた」

◀七夕のつどい フープの遊び



になったのでしょうが、まわりを喜びにつつんでくれた弟Dちゃんに、待ち望んでいた家族の気持ちを語る日が来るだろうと、すやすやと眠る小さな命に拍手を送りたい気持ちです。

七夕の集いに願いをこめて

保護者も参加し、地域の小さい友達「びよこグループ」も誘って七夕の集いをすることにしました。おばあさんやおじいさんもお招きすると普段の三倍もの人数に膨らみました。ホールで好きな遊びに取り組んでいる様子を参観していただく中で、その子らしさや楽しさが感じられる遊びの場になり、友達と共に育つ姿を理解していただく機会になりました。工夫のある絵本づくり、フープまわしもいろいろあり、移動しながら、何本も合わせてなど、それぞれのいい笑顔が見られました。歌を歌い、仲良しあそびや手あそび、次々に遊びが続きました。

その後、両親、祖父母に、少子化の中の子育ての課題を話しましたが、参観した内容と合わせて反響も大きく、各家庭で子育てについて話し合う場になったことを感じました。

参観者が笹につるしてくださった短冊に

子よ孫よ 揃いて眺む 天の川

七夕様 孫と一緒に 祝ひます

次の世を 背負うべきわらべ 正しく伸びよ

とあるのが目にとまり、続く世代を家族の温もりの中で生きていくことがどんなに幸せかを、震災の痛手の大きさから、なお強く思います。

(芦屋市立精道幼稚園)

『十里霧中』

——息子たちのイギリス公立校体験記(6)——

豊田 一秀

この十一月号の原稿を書いている現在は七月中旬である。息子たちの学校も年度末を迎え、イギリスでの二年目の学校生活を終えた。早いもので、私たち家族もこの地に暮らし始めてはほぼ二年が経つ訳である。息子たちは十六と十四になった。日本にいれば、高校二年生と中学三年である。

これまでの連載では、主に息子たちの通っている学校の行事や授業を中心に述べてきた。当初の心積もり

では、もう少し子どもたちの葛藤や家族の悩みなども含めて述べる予定でいたのだが、生活の渦中にある事柄は、なかなか文章にできなかったことを白状しなければならぬ。今回、ちょうど良い節目でもあるので、子どもたちの生活と心模様にも触れて、これまでの生活を少し振り返って見てみたい。

イギリスの学校に通い始めてから、先生や親しいイ

ギリス人に、子どもたちは学校に落ち着いたか、と良
く聞かれる。当然ながら、「落ち着く」と言っても
様々なレベルがあると思う。細かく考えれば、初期の
落ち着きだけを見ても、校舎の配置が分かる、学校の
雰囲気分かる、同級生や担任が分かる、自分の名前
を同級生や先生に覚えてもらう、時間割りが分かる、
学校の色々なルールが分かる、会話の中の単語が耳に
残るようになる、といったように実に様々な落ち着き
の過程があったのだと思う。今、息子たちはどの程度
の「落ち着きの過程」にあるのだろうか。だが、そう
考えている内に、落ち着きの「ゴール」なるものはあ
るのだろうかと思いついた。まさか全くのイギリス人
になることが、そのゴールとは言えない。

こうして考えていくと、どこに暮らしたとしても同
じようにそこでの生活というものがあり、その日々
の中で悩みや成長があるという至極当たり前の事実
に気付かされた。ただ、外国で暮らす場合は、それ
までの生活との差が大きいので、「落ち着く」とい
う言葉で

「生活」を表すことが多いのだと思う。

例えば、こんなことがあった。ある日、学校から手
紙が来て、読んでみると、英語の特別な援助をして
くださっている女の先生に対する長男の態度が悪い
ので、私に学校まで来て欲しいとのことであった。こ
んな呼び出しは未だかつてなかったことなので、緊
張して出かける。直接話を伺うと、せっかく教えよう
としているのに聞こうとしない、質問にも答えず無
視する、言ったことを家でしてこない、といったク
レームを聞かされた。そして、事もあろうに先生
が注意すると長男が、I HATE YOU! (お前なんか嫌いだ!)
と面と向かって言ったそうで、その中年の女の先生
は切れてしまったようだ。せっかく特別の経費を使
って、特別に教えてあげているのにというニュ
アンスが感じられた。先生の話ももっともなこと
なので、その場では、本人がまだHATEの持
つ言葉の強さを良く分かっていないと思うので
家で良く話しておく等と、長男の無礼を謝り、
気長に見てくださるようお願いし

てきた。

家に帰って、今度は長男から先生のことを聞くと、傲慢で、押し付けがましくて、デリカシーのない、とても嫌な先生だという。当時十四歳だった長男は、二年ほど前から大きく心の変化を見せ始めていた。自分が良い子でいるのをやめ、感情の起伏が激しくなり、人に対する好き嫌いが強くなってきていた。真の自分を捜す旅の始まり、正に思春期の入口といった感じであつたのだ。このトラブルは親としては全く迷惑な事であつたが、長男が否定的な気持ちを外に現す体験を保持するようになった事自体は悪いことではないと思つた。問題はその現し方であらうが、それは、本人がこれからいろいろな経験や失敗を通して身に付けていくより道はなからう。即ち、この種のトラブルは日本にいても同じように起こしていただろうと想像された事であつた。この小事件の顛末は省くが、その先生が幸か不幸か、しばらく後に転出されるまでは大きないさかいもなく、師弟共々耐えていたようである。これも

「落ち着く」の一つかもしれない。

次男の方は、こんな長男の変化を身近で見ているせいか、学校では良く勉強とスポーツをする真面目な生徒、家では少々甘えん坊の家族の盛り立て役という感じになつた。幼い頃の性格であつた気性の激しさもまだちゃんと持っているようで、本人は余り無理をしているという訳でもなさそうである。

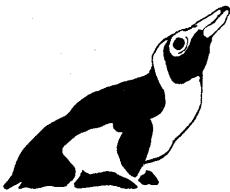
異国の田舎に家族四人で暮らすようになって、改めて感じるのは家族という存在が有機体であるということである。一人のコンディションが全員に影響し、家族の弱くなった部分を他に補うような動きが出てくる。子どもが小さかつた頃、一人が叱られると、もう一人がいつになく良い子になってしまつたりした事が思い起こされた。反面、いさかいの時など、お互いに逃げ場がなくて息が詰まるような気持ちができることもある。私は、家族それぞれが無理をせずに居心地良く過ごせるように心を配つたつもりであるが、当然のことながら私も家族に実に多く助けられた。日本にいて

も家族の基本的な関係や役割は変わらなかったであろうが、外国で暮らすということは四人乗りのヨットで大洋を航海しているようなもので、皆が助け合わないヨットはすぐに波にのまれてしまう。

さて、「落ち着く」に話を戻してみよう。現在、長男は学校の友達と英語で長電話をし、休みにはやはり友達とロンドンに買い物に行ったりしている。地域のプロバスケットボールクラブのジュニアチームに入っていて、今年は全英で八位になった。次男は、やはり休日には友達と町に出たり出来るようになり、地元のサッカーチームで活躍して見事にリーグ優勝に導き最優秀選手に選ばれた。二人とも遊びの英語には困らないと言った状態であろうか。外から見れば「落ち着いてき」たといえるのかもしれない。しかし、二人には様々な悩みがあるようである。日本の仲間と比べて勉強が遅れていること（実はこのおかげで助けられたわけだが）、もっとスポーツをしたいこと、高校や大学をどうするかということ、将来のこと、その以前に、な

ぜ勉強をしなければいけないのかということ、もっと色々なイギリス人と出会いたいこと。日本の友達に会いたいこと、そして自分の意思で外国に来たわけではないことへの不満、等々思い巡らしているのだろう。

息子たちの友達を横から見ていると思うのだが、日本での友達に比べて質素で幼い感じがする。持っている物を見ても、日本で流行っているらしいポケベルや携帯電話などは夢のまた夢で、音響製品も日本人の子どもにくらべれば持っている子が少ないし、また持っているても普及品である。勿論、ここでも飲酒、麻薬、夜遊び、異性交遊、そして就職難など問題は大きいのだが、塾も受験地獄もなく、日本的な忙しさはない。ゆっくりと時間の流れるこんな環境の中で過ごしながら、息子たちにはゆっくりと悩んで、そして自分で納得の行く答えを見つけて欲しいと私は思う。



イギリスの子どもの生活がゆっくり流れることについて述べてきたが、これは何も子どもの生活に限ったことではなさそうである。イギリス人がどこにでも列を作り、またそれをきちっと守ること、信号が黄色の時、必ず車が停まること、微笑みで挨拶を交わすこと等、日常の中でもイギリス人がせいていない事を感じさせられる。

平日の公園に行ってみると、父親が二、三歳の子どもを連れて散歩をしている。子どもが膝までの池に入っただけ、濡れた衣服の後始末をする父親の手際は、なかなか見事である。ああ、のんびりしていいな—と思って後で話してみると、その父親は失業中であつたりする。これがまた、イギリスの難しいところである。

私も息子たちの散髪をいつもしてやっている。彼等にしてみればイギリスの床屋に行くよりも文句が言えるところが良いらしい。十六歳と十四歳の子どもの髪を刈らせてもらえる光栄？ をかみしめながらも、公

園で会ったあの若い父親を思い出していた私であつた。

さて、私達のポロヨットの旅も、もうしばらく続きそうである。昨年の十月より隔月に連載を始めた『十里霧中』であるが、霧も晴れぬままに、ひとまず今回で区切りをしたい。これまでの連載を読んでくださった方々に心より感謝申し上げる。

先日、息子たちは二人で日本に発つた。三週間だけだが、二年ぶりの日本である。久しぶりに友と会い、語り、何を感じてくるのであろうか。自分たちの成長を体感できるような旅であつたらと私たちは願っている。変な髪型だと笑われなければ良いが……。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)

朝のこと

高橋 陽子

「先生、おはよう」、今日も一番に駆け込んできた、Aくん。「おはよう、今日も一番ね。でも、お母さんは？」と聞くと、照れ笑いをして、そのうちお母様が入っていらっしやる。当園では、園児は保育室まで保護者と一緒に登園し、手洗い・うがいを済ませて、各自、遊び出す、という生活の流れがある。

一緒に入ってきて欲しい、という思いから、「お母さんは？」と毎朝聞いてしまうが、彼は、笑ったり、来る途中のことや、家から作ってきたもの話などして、そのうち手洗い・うがいを済ませていく。ついこの前まで、「うがいはしましたか？」なんて聞いていたものだから、「先生、手洗って、うがいもしたから、紙頂だい」と、要求をストレート

に言えなくしてしまつたな、と心の中で苦笑いしながら、Aくん、一年数か月通園することで、自分から生活を始めるようになったね、と頷き、「紙、か……」と迷わされる。

そんなことを思っているうちに、次々に登園してくる。母親と向かい合わせに両手をつなぎ、さか上がりのようなことをして、「じゃあね」と別れる子。

「先生、一緒にママにバイバイして」と私の手をとる子（年中からの入園で初めは泣いて離れられなかったのが、自分で家庭と幼稚園の生活を切り離す方法を探っていて、あと一步のところまでできているな）。「おはようございます」の声はとても元気に入ってくるのに、本棚の横に置いてあるイスに座って、数十分、本を読み続ける子。「お外行ってきます」と、さっさと靴をはき替える子（私も「行ってらっしゃい」と元気よく送り出せる。「先生も一緒に行きよう」と言われると、「まだ全員きてないか

ら、今は行けないわ」「それじゃ、

あとで来てよ」。

一瞬、ことばに詰

まりながら、「お

時間あいたら行く

から、先に行つて

いてね」と、いつ

行けるとも知れない

約束をしてしまう。木製の汽車とレールにとび

つき、黙々と遊び始める子（年中から入園の子ども

たちで、気持ちの安定を計るとともに、回りを探つ

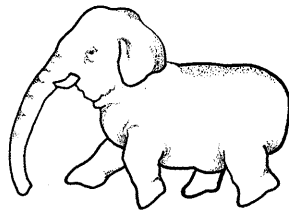
て幼稚園での過ごし方を自分たちなりに考えている

らしい）。教卓の下にもぐり込み、険しい目つきで

辺りを見回している子。さっと自分用の引出しから

ミニ四駆（私が長方体の箱を作り動くようにタイヤ

をつけ、子どもが、改造する、と言って、色を塗っ



たり、ウイングをつけたりしたもの)を取り出し、小型積木や板や時にはイスなど組み合わせてレース場を設定する子、などなど、十人十色のスタートをきる。

朝はとにかく、全員の子ともたちと元気に挨拶して、それぞれが遊び出すのをにこやかに見守りたい、と願っているが、実際に三十三名の子ともたちが二十分位の間に次々に登園し、色々な表情を持ち、色々な生活のスタートをきられると、さて全員とどんな顔で挨拶したかすらわからなくなってしまうこともある。

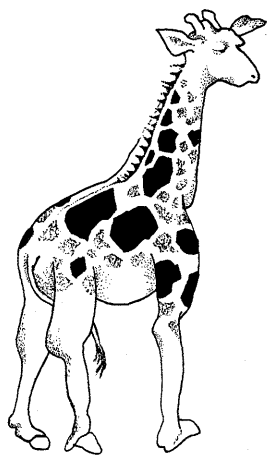
三年保育の女の子たちは、つき合い始めて一年数か月も経ち、その子なりに、あの子はどんな子、とわかってきていて、○○をして遊びたいという思いより、誰と一緒にいたいという思いがとても強く出ている。そのためか、部屋に入ると、その子が来ているか、他の子と遊び始めてはいないか、が気にな

るし、来ていなければ待ち続け、来るなり「一緒に遊ぼう」と言いかけ寄る。それで安定できるのだし、幼稚園という生活の場にスムーズに入りこめているし、いつも同じ二人の組み合わせではないのだが、気にかかってしまう。その日のペアがままごとコーナーに入ったとすると、次に来た人からは遠慮してしまふ。他の子とくっつければ、そこから絵本屋さんや外に行くといった遊びが生じるが、ままごとをしている女の子と遊びたい、と思いをふくらませて登園してきた子にとっては、辛い思いを味わうことになる。ままごとをしたい、という思いの子は、誰がいようと入りこみ、ダメと言われても、道具をコーナー外に持ち出してままごととにこだわる。それができない子は、猫になって「ニャーニャー」と言いながらすり寄っていったり、「先生、入れてくれない」と言ってきたり、どうにか入る方法を考えてアタックする。私が救いを求められ

た時、まだ全員に挨拶していないから、は通用しない。「○○ちゃんも一緒にしたいって」と言ってみるが、「え——」と、拒否されるのは当然。二人で安定しているのだから、○○ちゃんが入ってもきちんと仲間として受け入れられて、三人が楽しい、と思えるかしらと頭には？がつきながらも、三人目の子の気持ち、特に一日のスタートがかかっていると思えば、「どうして入れないの？」と再挑戦してみる。二人で顔を見合わせて黙っていれば、個人的に「△△ちゃんはどう思う？」と聞いてみる。大抵、個人的に聞くと、「いいと思うけど」の返答をもらえらる。二人が共通の手作りのアクセサリーをつけている場合は、「これと同じのがあれば入っていいよ」となり、大急ぎで作り、ままごとコーナーへと送り出す。三人で盛りあがることもあるし、私の頭のようなようになって、赤ちゃん役で寝ているだけだったり、いつの間にか抜けてしまっていることもある。

「先生」、大きな声が園庭に出るドアのところからする。二年保育から入園のBちゃんである。入園当初は、集団生活は初めて、というところで私を先生と認めてくれるどころか、近づくこと逃げて行くこともある子だった。広い場所で自由を存分に楽しんでいることも理解できたし、降園時にはきちんと戻ってくる様になってきたし、誰かが何かを持っていると、「頂だい」と言う様になってきての、朝一番の「先生」である。「何かしら」と嬉しく近づいていくと、Bちゃんの表情が変わってしまった。母親がまだ部屋にいて、その視線をBちゃんが察知した瞬間だった。聞かれてはいけないことを言ってしまったかのようだったが、私は何事もなかった如く、「なあに」と言い、園庭の方へ誘ってみる。まだ気になる様だったが、年長児が種を蒔いた植木鉢を指して、「違う葉っぱが出る」と教えてくれる。毎朝、この鉢を見るのが楽しみらしく、「何にも出て

ないね」「葉っぱが出てきたよ」と観察してから、遊びに出かけていた。子どもなりに、考えての幼稚園の生活に入るための手段が、母親の視線によって家庭へと戻されてしまったのかしら、と思いつつ、それでも園庭へ駆け出していったBちゃんの逞しさを嬉しく思った。もう一つ、母親絡みのことであるが、部屋に入るなり、「あのね」と私の参加できなかった地曳網の行事の様子を話してくれようとしたCくん。彼が来るまでの十数人はいつもの朝を迎えていて、私としては、誰かお話ししてくれるかしら、と期待感が無きにもあらずだったので、「うん、うん」と聞いていると、母親がきて、「手洗ったの?」とことばを遮えざる。Cくんはそのまま流し台の方へ行き、結局それ以上は聞くことができなかった。Cくんの母親は経緯がわかっていなかったたので、所定のことを済ませたか、が気になり、声をかけたのであろう。私も登園してくる子ども



もの思いを汲む前に、「うがいをしましょうね」「手を洗いましたか」と言っていることがあるので、母親に同感しながら二人の背を見つめてしまった。他にも色々な朝の風景があり、子どもたちを迎える二十分間、ずっとにこやかに、とやかない場面は、数限りない。そのうえ、「はい」と言ってしまう気にならないものの、私自身の中に決めかねてしまい、一瞬、表情が硬ばってしまうことがある。

最初に書いた「紙、頂だい」と「〇〇作って」の二つのことばである。Aくんなどは、紙を渡せば本人なりの工夫で盾や腕にはめる武器などを作り出してくる。年少時は、何か私に描いてもらい、Aくんが色を塗り、切って、「お面にして」と、一穴パンチで穴をあけ、ゴムを通してもらう、というやりとりだったのが、今では自分なりに作りたいものがあったて、紙を要求する。でも、私はそこで、前日も前々日も、一つ作りあげる度にもう一枚、もう一枚、といわれ、一日に五枚も六枚も渡していたことを思い出す。Aくんだけではなく、紙を要求してくる子どもには、つい、ある物で遊んで欲しい、との思いから、その子の朝の気持ちを知らうとする前に、ためらってしまうのである。

「〇〇作って」に対しても、ためらいが生じることが多い。仲間に入るために同じ物を作って欲しい、という気持ちから言ってきた場合は、わかり易い

し、それなら、とすぐにでも作るが、その子どものイメージの中にあって、そのことばを聞いただけでは、私の中にイメージとして共有できないものや、年中時のこの時期に、一人に応えることでの他への影響を考えてしまうものに対しては、返答に困ってしまう。朝から「それは作れないの」と拒否することばを何度言ってきたことか。落ち込みそうになる。が、子どもたちの朝は始まっている。私の対応がどんなであれ、自分たちなりに生活をスタートさせられる子どもの力に感服しながら、複雑な思いを抱かざるを得ない私。せめて、明るく元気に朝の挨拶を交わし、その子なりに遊び出していくのをにこやかに見送りたいと願う毎日である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

外国の文献から

『心情と知性の教育』

—日本の就学前と小学校教育に関する考察—

第四章 小さな集団——子どもたちの活動の拠点

徳田 治子

日本の小学校では、担任教師が、何の助けも得ずに、一人で、三十人から四十人の生徒を受け持っている。そのような大きな集団を日本の教師は、どのように運営しているのだろうか。本章で

は、日本の学級生活の基本的単位となる緊密に結びついた小さな集団（幼稚園では、「グループ」——すでに英語の外来語として知られている）、小学校では、「班」と呼ばれるもの）を通して、

その学級生活を見ていきたいと思う。

緊密に結びついた小さな集団

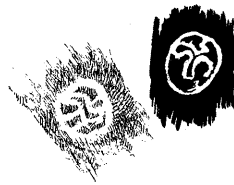
——グループ・“班”——

班やグループと呼ばれる緊密に結びついた小さな集団は、学級運営の効果的な単位であり、いくつかの点で家族に似た特徴を有している。その特徴として、まず第一に、これらの集団は、算数から給食、体育にいたるまで様々な活動をとにもすることがあげられる。集団は、臨時的なものでもないし、読書などの特定の活動のみに従事するものでもない。第二に、集団は、能力や特性という点で、様々な子どもたちから構成され、学業的にも、社会的にも、子どもたちがお互いに学び合えるようにというのが、集団をつくることに込められる教師側の核となるねらいである。第三に、こ

れらの集団は、子どもの発達に関して、学業面だけでなく、社会的、情緒的、知的側面すべてを支えるように期待されている。

集団の構成と運営

子どもたちは、班やグループといった緊密に結びついた小さな集団のなかで、日常の様々な活動に参加することを通して、多くのことを学んでいく。しかし、そこでの学びは、ただ単に生じることではなく、その影には、集団の構成や運営、集団が従事する課題を綿密にデザインする教師の働きがある。例えば、教師は、集団のメンバーを決定する際、友だち同士を一緒にしたり、内気な子どもや遅れのある子どもを世話好きな子どもと一



緒にするなど、リーダーシップや社会性、絵や運動能力にいたるまで、子どもたちの多様な能力や性質を考慮した様々な方略を用いる。多様な構成員と日常の様々な活動を行うなかで、子どもたちは、例えば、算数の得意な子が鉄棒では援助が必要であったり、みんなの前では、内気な子どもが班や集団のなかではおもしろいことを言ったりするなどお互いの強いところと弱いところの双方を学んでいく。日本の学校で、能力が強調されず、努力に重点が置かれている理由の一つは、学級での活動が、様々な能力が混合した集団で経験されることにあるかもしれない。また、このような多様な集団は、社会的にも学業的にも、子どもたちの発達に必要な資源を準備している。これらの集団は、幼稚園では、少なくとも一年、小学校一年生では、平均二か月維持され、その継続の長さも特徴の一つであるが、このことも集団における子

どもたちの学びを支えている。安定した関係のなかで、子どもたちは、お互いのことをよく知るようになり、それを土台にして様々な活動での協力の仕方について学んでいく。教師は、集団を組みかえる際、旧グループのもたらす安心できる親密さやスムーズな協力関係と新グループのもたらす新たな友人と協力関係を結ぶ機会の二種類の利点のバランスを考慮しながらその時期を決定する。

集団を支える日常の活動

集団の構成や運営とともに、班やグループでの子どもたちの学びは、様々な活動に支えられている。学校生活の多くの楽しい活動（食事、ゲーム、遠足など）が、グループや班を単位として行われ、子どもたちは、個人の名前ではなく、「りんご組さん」「四班さん」などグループの名前で呼ばれることがしばしばある。これらは、日本の

多くの教師が重要だと語るグループの「まとまり」の形成に貢献している。また、活動そのものに対する評価についても、活動の正否はしばしば教師や子どもたちによって公言されるが、その報酬としては、最初に準備ができた集団が一番最初に行くといったもので、得点などの外的報酬は用いられない。教師は、そのような外的報酬に支えられた競争を「負けたグループは、その後の活動を一緒に楽しく行えない」「能力の劣る子が仲間から嫌われてしまうかもしれない」と、集団のまとまりを壊すものとしてできるだけ避けようと努めている。

反省

日本の教師たちは、集団の一部となることは、子どもたちにとって、自然で楽しいことであると同時に、教える必要があることと考えている。そ

のため、教師は、他者とうまくやるための多くの基本的なスキルを様々な場面で子どもたちに教える。しかし、私の考えるところで



は、他者と一緒に活動することとはどんなことかについて学んでいく最も有効な活動は、「反省」である。日本の幼稚園で、この「反省」を経験せずに、二、三時間の間でも、過ごすことは出来ない。集団での活動の後、グループのメンバーは、自分たちの協力の度合を反省する。この反省の間、子どもたちは、何が適切であったか、ある活動のなかで、責任ある参加を行うことはどういふことなのかについて自ら考え、そして、同時に他者の考えを聞く機会をもつ。この反省という活動のめざすところは、社

会的スキルの獲得という問題にとどまらず、子どもたちが集団生活に持ち込む価値観そのものにもまで及んでいる。

小集団活動の功罪

日本の幼稚園や小学校を観察する間、私は、一般に子どもたちの他者の扱いに心地よさを感じたものである（非常に内気な子どもでもグループのなかではおしゃべりをし、自然な愛情と親密さがそこには存在していた）。しかし、小集団もまた、強制力を持つのではないだろうかという疑問も浮かんでくる。事実、最近、日本の学校で問題になってきているいじめの背景には、集団の心理的圧力がある。クラスメイトからのからかいや無視によって、自殺を含む必死の手段に訴える子どもたちがいる。

アメリカでの研究は、小集団への参加は小集団

を支える価値の如何によって、子どもの発達を促したり、妨げたりすることを示唆している。つまり、問題は、子どもたちが小集団に参加するかどうかではなく、そこでどのような価値が子どもたちの他者との活動を支配しているかである。小集団の中で、子どもたちは、互いを公正さや敬意をもって扱うように促されているのか、それとも単にできるだけ敏速に課題をやってしまうことを押しつけられているのか？ 反省の時間は、安全な心からの反省の時間なのか、それともつるしあげの時間なのか？ 現に、時々、私は日本の教育現場で、集団に与えられている権威を不快に感じることがあった。あるクラスでは、子どもたちがクラスメイトをつめを切っているか、ハンカチを持ってきているかなどとチェックしているのを目にした。彼等は、怠けたクラスメイトの数を集計して、クラスに報告していた。日本の教師は、こ

のような仲間間での管理を大人の権威よりも脅威でないと感じているが、私としては、なぜ、公的な忘れ物の一覧表などというものが存在するのか不思議であった。

まとめ

日本の子どものグループ活動は、アメリカでの“協同学習”を我々に思い出させる。実際、協同学習は、日本で長い歴史をもつアプローチであり、質問紙による大量調査や観察研究から日本の小集団を用いた教育法は、我々の協同学習の定義にあうことが示唆されている。しかし、以下に示すように、いくつかの点で日本の小集団学習は、アメリカのそれとは異なっている。

1 日本の子どもはめったに能力別にはグループ分けされない。

2 日本の子どもがグループのなかで活動するときには、一般にグループとして活動する。その活動は相互に支え合うものであり、

集団にいなから、個人

の作業——例えば、ワークシート——を行うことが多いアメリカのそれとは異なっている。

3 日本の教師は一般に活動そのものがおもしろく興味をそそるものを選ぶ。一方、アメリカでは協同学習に対して、ポイント制やグループの成績など子どもたちに課題に取り組ませるために、外的報酬を用いる場合がある。

4 日本の生徒や教師はグループの活動を社会的な目標のもと（援助、友情、責任感など）に見ている。アメリカの協同学習のなかにもそのような



実践を行い、見事な成功をおさめているものもあるが、一方では、成績やポイントなどの外的報酬を用いたり、子どもがいかに作業をしたかではなく、協同作業の結果を強調したり、子ども自身の反省ではなく、教師がその評価を行うということが頻繁になされている。

日本の教師は、小集団やクラス、学校の理想的な姿を家族という例えをもちいて描写する。この例えは、学校を工場とか仕事場としてたとえることが一般的なアメリカの学校とは対照的である。この例えの比較から、単純に事実を一般化することとはできないが、少なくとも、そこには次のような示唆が含まれている。後者の「工場」とか、「仕事場」という比喩は、過程より結果の重視を、前者の家族という比喩は、集団の恒久的で緊密な結びつきとともに、メンバーの発達のすべての面に対する関心を表わしている。私がインタ

ビューをした教師たちは、小集団活動の成功は単に起こっているのではなく、その裏には、注意深く活動を組み立てる教師の働きがあると言及していた。集団での活動は、子どもたちの間に結びつきを育み、子どもたちが互いのポジティブな性質を認め合うことができるように助けるものでなければならぬ。先に指摘したように、重要なのは、子どもたちが小集団に参加するかどうかではなく、どのような価値が子どもたちの活動を支配しているかである。先にあげた小集団活動の功罪と合わせて、小集団を支える価値やその目標について、我々はもっと敏感でなければならぬ。

(お茶の水女子大学大学院)

編 集 後 記

この夏、我が家ではノラ猫を巡る小さな騒動があった。娘と友達が、通りがかりの人に子猫三匹を押しつけられたことからそれは始まった。家では飼えないので困っていたが、犬と猫を飼っている方がひとまず預かってくれて里親を捜すことになった。しかしその夜更け、子猫を捜す悲しい声を私は聞いてしまった。

子どもたちは翌日からポスターを作り「子猫をもらってくださいませんか」と叫んで歩いた。私は私で、文句を言いつつも子猫をダンボール箱に入れての親猫探しに巻き込まれていた。ようやく親猫が見つかり一件落着と思いきや、猫の住み家の近く

に猫が大嫌いなおばあさんが住んでいた。猫を見つげると棒で叩いたり、かわいがっていると「どこかに連れて行きなさい」と怒るといふ。

子どもたちは子猫を緊急避難させ、おこづかいでエサを買い、寝食も忘れる程夢中に世話をしていたが、結局、親猫の元に戻した。その後もおばあさんとの闘いは続いている。

ノラ猫の里親や不妊手術を考える人、ノラ猫が大嫌いな人、親猫に返せという親、飼いたいのに飼えない自分——娘はノラ猫を巡る様々な人の思いの渦の中で、いとおしや悲しさや友達とのつながりなどを感ししながら、また少し成長しようだ。

端から見れば「面倒くさい」ことの中で、子どもは育っている。「面倒くさい」ことを自ら楽しむのが生活なのだと改めて思う。

(田)

幼 児 の 教 育

第九十五巻 第十一号

(一九九六年十一月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成八年十一月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二二一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五二二一

発売所 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三三三九五六六一三(営業)

☎〇三三三九五六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇一一一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

子どもの心とまなざしで

倉橋惣三絵本エッセイ

倉橋惣三がキンダーブックに寄せた解説をまとめた一冊。子どもをあたかなまなざしで見つめた彼の姿がよくわかると共に、私たちに子どもの心理とものの見方をていねいに教えてくれる。リズムカルで詩のようなやさしい語り口が心地よく、プレゼントにも最適である。



解説／本田和子

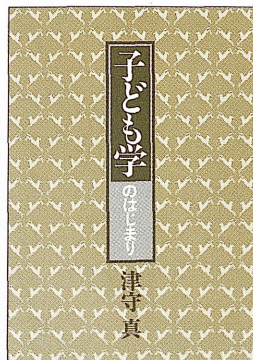
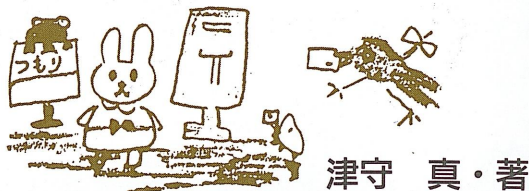
倉橋惣三 著

B 6 変型判・定価1,200円（本体1,165円）

キンダーブックの
フレール館

子ども学のはじまり

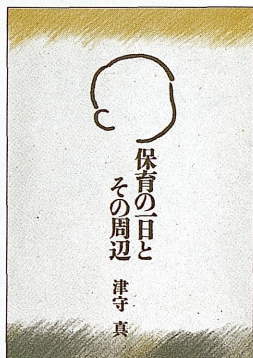
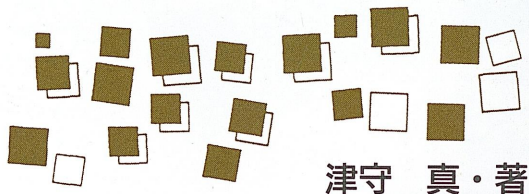
子どもの行動の見方と研究法について、著者が10年来考えてきたことを論述し、保育の原点を示す。人間学的保育学のスタート地点を示す労作。



B 6判・296頁・定価1,750円（本体1,699円）

保育の一日とその周辺

保育実践の基本となる「一日」を中心に保育論を展開。保育の原点をわかりやすく述べ、豊富な実践と深い省察で、保育者へ新しい保育の指針を明示。



A 5判・248頁・定価1,600円（本体1,553円）

キンダーブックの
フレール館